

## 金城学院大学国際情報学部「日本社会論」(全学年) 授業実践報告

時岡, 新  
金城学院大学国際情報学部 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/4822583>

---

出版情報 : オンライン授業の地平 : 2020年度の実践報告, pp.76-76, 2021-04-30. 雷音学術出版  
バージョン :  
権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International

## 1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

この授業は中高免教職課程のなかに位置づけられており、高等学校一種(地理歴史)取得のための「教科及び教科の指導法に関する科目」のひとつである。内容をひとことで言えば「明治期以降の近代日本史」なのだが、この授業では政治史、経済史よりも社会史、文化史に比重を置く。また主体的な受講をうながすために(1)事前学習として各回でみる期間の年表的情報を各自で準備し、授業のはじめにグループで情報交換する[できごとの相互関係の確認と、それらへの興味の喚起]、(2)授業のおわりに当該期間の歴史的経緯と今日の日本社会との関連、関係をグループでディスカッションしてコメントシートを作成する[近代史を参照しながら“日本社会の自己紹介”ができるようになると呼びかけている]の二項を正規の課題(各回 4 点×15 回=60%相当)とし、期末レポート(40%相当)とあわせ成績評価する。

受講者の個々の状況が大きく違う(高等学校で日本史、世界史を履修している/いない、履修していても日本史A、世界史Aのみなど)ため、授業のはじめ、おわりのワークがこの授業の「きも」である。たとえば大正期をあつかう回では、高校で歴史科目をほとんど履修していない受講者たちが、日本史に親しみのある受講者に「はいからさん(が通る)の頃だよ」と言われてイメージを喚起されるのが定番だった。またこの科目は本学・国際交流センターが留学生に受講を薦める一つでもあり、例年は東アジアからの学生のコメントが他の受講生に刺激的でもあった。このように旧来は学習経験や背景の異なる学生たちが互いの声が聞こえる環境のなかで複数のグループをつくり情報交換する“うまみ”を享受していたのだが、オンライン授業の実施によりそれらは無くなった(留学生も来日しなかった)。

2020 年度はそれらの代わりに Google Meet で授業全体のミーティングルームと併行してグループごとのルームを作り、授業のはじめとおわりに学生たちにそちらに移ってもらい意見交換などを行った。

## 2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

グループワークの第一声は「何をやっていいかわからない」であった。この反応は昨年度までの対面状況でのそれとさほど変わらない。他のグループで話されている“何か”を聞きつけてやっと自分たちも話しはじめる(「はいからさん」は好例)のが常態だったから。しかしリモートではそのような共鳴が生じない。誰かひとりが授業と関係の無い話題を出せばそれに引きずられてしまい、調べてきたことや受講の感想などを言えば「真面目か!」と返される場面もあったらしい(詳細の紹介は控えたい)。他のグループからよい刺激をうけるしかけづくりと、積極的に発言しにくくなる傾向の解消が課題である。

また、授業はリアルタイムとオンデマンドの両形態で実施した(それぞれ全回の1/2ほど)。本学部は全員にPC 保有を義務づけ、この授業では毎回の持参を求めているが、ノートテイクに用いない学生もいた。それが、リアルタイムの回のコメントシートに「分からない用語をその場で調べることができてよかった」とあり、PC を介さざるを得ない受講によって生じる企図しない効果であった(PCの持参はまさにそれを狙っていたのだが)。また別の学生のコメントによれば、オンデマンドの場合はテレビやラジオの「ながら視聴」と類似の状況が生じているようで、PC を注視する必要も無く、何かをその場で調べる(ネット検索する)こともほとんどなかったようである。オンデマンドではグループワークも実施できないから、この授業についてはリアルタイムに軍配が上がると言えるだろう。